

実践のまとめ（第5学年 社会科）

見附市立葛巻小学校 教諭 小野塚 智大

1 研究テーマ

社会科の学習に主体的に向かう力の育成

～個別最適な学びと協働的な学びの往還を通して～

2 研究テーマについて

(1) テーマ設定の意図

学習指導要領では、「社会的事象について、よりよい社会を考え主体的に問題解決しようとする態度を養うとともに、多角的な思考や理解を通して、地域社会に対する誇りと愛情、地域社会の一員としての自覚、我が国の国土と歴史に対する愛情、我が国の将来を担う国民としての自覚、世界の国々の人々と共に生きていくことの大切さについての自覚などを養う。」ことが求められている。まさに社会の形成者として、社会に主体的にかかわっていく児童の育成を目指している。自らのこれまでの実践を省みると、決められた学習内容を楽しく、かつ、効率的に教授するために、児童の関心を高めるための資料の見せ方や授業展開を考えていた。授業の瞬間、瞬間を切り取れば児童は意欲的に取り組んでいたが、教師主導であり、児童自身が社会的な事象に対し主体的にかかわってはいなかった。

奈須（2021）は、複数校の実践研究から、児童は「本来学び手としての主体性や力を有しており、教師が単元の見通しを提供することで力を発揮できる」ことを指摘している。また、独自学習と相互学習の往還、すなわち個別最適な学びと協働的な学びの往還が学びにとって重要であると指摘している。

以上のことから、単元の学習に関わる情報を児童に開示し、個別に学ぶ時間を十分に確保した上で協働的な学習を取り入れることで、社会科の学習に主体的に向かう力を育成したいと考え、本テーマを設定した。

(2) 研究テーマに迫るために

① 単元の初めに学習の手引きを示し、児童自身に学習計画を立てさせる。

単元のねらい、学ぶべき内容、時数などの単元の学習計画等を、児童が一目見て分かるようにまとめ、学習の手引きとして示す。児童は、それを見て、自分の学習スタイルに合わせて学習計画を立て、自由な進度で学習できるようにする。また、学習の手引きにチェック欄を設け、全員が学ぶべき内容に関わる学習を行ったか、適宜、教師と確認する。

② 自分の学び方で学習する時間を十分に確保し、協働的な学びを促す。

自由進度学習の時間を十分に確保し、自分の学びに向き合うことができるようにする。単元の導入では一斉授業で興味関心を高め、単元中盤の追求場面では自由進度学習の時間を十分にとり、単元終末には学びを交流する時間を設定する。また、適宜、教師とともに学習の見通しもつ時間を取り入れる。

(3) 研究テーマに関わる評価

質的な評価としては、単元末の振り返りの記述から、計画と照らし合わせ学習を自ら調整する姿や、自分事として食料生産について考えている姿を見取る。量的な評価としては、単元実施前後で学習内容についての意識調査を数値化できるアンケートで実施する。

3 単元と指導計画

(1) 単元名

これからの食料生産（小学社会 5 教育出版）

(2) 単元の目標

- 日本の食料生産の概要や、食料生産が国民の食料を確保する重要な役割を果たしていることを理解するとともに、地図帳や地球儀、統計などの各種の基礎的資料を通して、情報を適切に調べ、まとめる技能を身に付けるようにする。
- 日本の食料の生産や輸入に見られる課題を把握して、その解決に向けて多角的に考える力、考えたことを説明したり、それらを基に議論したりする力を養う。
- 日本の食料の生産や輸入について、主体的に学習の問題を解決しようとする態度を養うとともに、多角的な思考や理解を通して、日本の産業の発展を願い、日本の将来を担う国民としての自覚を養う。

(3) 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<ul style="list-style-type: none"> ・輸入など外国との関わり、生産量の変化、生産に関わる新しい取り組みなどについて、地図帳や地球儀、統計などから必要な情報を集め、読み取り、食料生産の概要を理解している。 ・調べたことを文章や表などにまとめ、日本の食料生産は、国民の食料を確保する重要な役割を果たしていることを理解している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・輸入など外国との関わり、生産量の変化、生産に関わる新しい取り組みなどに着目して問いを見だし、食料生産の概要や食料生産が国民生活に果たす役割について考え、表現している。 ・学習したことをもとに、これからの農業や水産業の発展について、消費者や生産者の立場から多角的に考え、適切に表現している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・日本の食料生産や輸入について、予想や学習計画を立て、主体的に学習問題を追究し、解決しようとしている。 ・学習したことをもとに、これからの農業や水産業の発展について、消費者や生産者の立場から多角的に考えようとしたり、社会生活に生かそうとしたりしている。

(4) 単元の指導計画と評価計画（全5時間、本時5／5時間）

次 (時数)	学習内容	学習活動	主な評価規準と方法
1 (1) 一斉	<ul style="list-style-type: none"> ・単元を貫く学習問題を決める。 ・国内の食料品の生産量の減少、輸入量の増加に伴う食料自給率の低下について知り、日本の食料自給率向上が必要であることを理解する。 ・学習の手引きを用いて、学習計画を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・Google Classroomに、疑問に思ったこと、調べたいと思ったこと、考えたいと思ったことを打ち込む。 ・自分の学習計画を立てる。 ◎「豊かな食を守りながら日本の食料自給率を上げるにはどうすればよいか。」 	<p>態度</p> <p>見通しをもって学習する計画を立てようとしている。【行動、チェックシート】</p>

2 (3) 自由 進度	<ul style="list-style-type: none"> ・学習の手引きや自分の学習計画に沿って、自由進度学習を進める。 ・毎時間、めあて→実行→振り返りのサイクルで、学習を進めて行く。 	<p>◎学習問題について学び進め、自分の考えをまとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ノート、もしくはスライドにまとめる。 ・学習の手引きのチェック欄を、適宜、教師と確認する。 	<p>態度</p> <p>学習の手引きや自分の学習計画に沿って、学習問題に対し答えを出そうとしている。【行動、チェックシート】</p>
3 (1) 交流	<ul style="list-style-type: none"> ・学習問題について考えを交流し、自分の考えを深める。 	<p>◎「豊かな食を守りながら、食料自給率を上げるためには、どうすればよいか。」についての意見交流を通して、日本の食料生産について、自分の考えを深める。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・それぞれがまとめたものを交流する。 ・交流後、自分の考えの変化や、学習の取り組み方について振り返る。 	<p>知識・技能</p> <p>日本の食料生産の概要が分かっている。【ワークテスト】</p> <p>思考・表現</p> <p>学習問題への答えを、根拠となる資料を示して表現している。【ノート・スライド】</p> <p>態度</p> <p>振り返りの中で「粘り強さ」や「学習の調整」に関わる記述や自分事として考えている記述をしていたり、学習中の姿として表したりしている。</p>

4 単元と児童

(1) 単元について

本単元は、日本の食料生産の現状や課題、そして、未来に向けた取り組みについて考えていく。そこから、生産者や企業、消費者それぞれが食料の安定供給について考え行動していることを捉える。食という最も身近で関心のある事柄から、社会の仕組みについて考えることができ、学んだことを日々の生活にも生かしやすいため、児童にとっても学びがいのある単元であると考えられる。

(2) 児童の実態

本学級は、男子13人、女子13人、計26人である。「米作りのさかんな地域」の学習までは、「一斉授業15分、その後30分個人でノートを作り、黒板に掲示して交流」という流れで、アウトプットの多い授業をしてきた。そのため、知識が定着しており、ワークテストの点数は平均的に良い傾向にあった。しかし、社会的な事象に興味・関心を持つ児童が多い一方で、学習問題が教師から一方的に与えられた時や学習の見通しがもてない時に意欲が低下する傾向がある。そこで、「水産業のさかんな地域」の学習では、自由進度学習を取り入れた。単元後のアンケートでは、「主体的に学習することには向いているが、テストの点数を取ることに繋がらない」という声があった。そこで、本単元では学習の手引きを示し、見通しをもたせる。そして、知識・理解の部分は教師が指導し、考えを深める部分では、個別に学習する時間を十分に取るように単元を構成する。以上の手立てから、社会的な事象について主体的に考え、表現・交流し、学ぶ楽しさや自身の成長を実感させたい。

5 本時の展開（令和5年9月21日実施）

(1) ねらい

「豊かな食を守りながら、食料自給率を上げるためには、どうすればよいか」について意見交流を通して、様々な策があることに気づき、日本の食料生産について自分の考えを深めることができる。

(2) 展開の構想

3時間かけて学習問題について自ら調べ、まとめた自分の考えを相手に伝えたい、また、相手の考えを聴きたい、という意欲が高まっている。相手に分かりやすく伝えるために調べたことや自分が考えたことをもとに作成したスライド資料やノート記述等の学びレポートを用いて交流することで、日本の食料生産の未来について多角的に考え、自身の考えを深めることができると考える。

(3) 展開

時間 (分)	学習活動	T：教師の働き掛け C：予想される児童（生徒）の反応	□評価 ○支援 ◇留意点
5	・本時の流れ、めあてを確認する。	T:◎『豊かな食を守りながら、食料自給率を上げるためには、どうすればよいか。』について、交流を通して、考えを深めることができる、を目標に1時間学習しましょう。	◇学びレポートはノートやタブレット、それぞれ異なる。
25	・友達の学びレポートを見たり、質問や意見交換をしたりする。	T:班の1番の人から順に発表します。1番以外の方は、どんどん回って、様々な考えに触れましょう。気になったことはどんどん質問しましょう。 C:生産者を支えるために、少し高くても国産のものを買うことが大事なのは分かるけど、安いものを買いたい人が多いんじゃないかな。 C:生産者さんを支えている企業の野菜などを買うことも大事そうだな。	○教師も一緒に交流をすることで、質疑のモデルを示す。
5	・代表児童の全体発表。	C:（代表児童の発表）	
10	・交流を経て、再度自分の考えをまとめる。 ・単元の学習への取り組み方について振り返る。	T:交流を終え、『豊かな食を守りながら、食料自給率を上げるためには、どうすればよいか。』について、もう一度自分の考えをまとめましょう。 T:この単元の取り組み方への振り返りをしましょう。	□日本の食料生産について、交流を通し、自分の考えを深めることができる。 (記述)

(4) 評価

学習問題について意見交流をすることを通して日本の食料生産について自分の考えを深めることができる。（思考・判断・表現）

単元の振り返りの記述に、計画と照らし合わせ学習を自ら調整する姿や、自分事として食料生産について考えている記述が見られる。（主体的に学習に取り組む態度）

6 実践を振り返って

(1) 授業の実際

① 単元の学習問題を明らかにし、学習計画を立てる。(第1次)

まず、スライドでスーパーに陳列された3種類のにんにく(中国産、スペイン産、国産)の写真や、日本の食料自給率の低さ、そしてこれらがもたらす影響などについて紹介した。次に、得た情報から、考えられることや疑問、調べたいことなどを共有した。その中で、「豊かな食を守りながら、食料自給率を上げるには、どうすればよいか」という学習問題を設定した。その後、学習の手引きを示し、学習のねらいやゴール、通過点(ステージリスト)や時数などを確認し、児童に学習計画を立てさせた。

② 計画を基に学習を進める。(第2次)

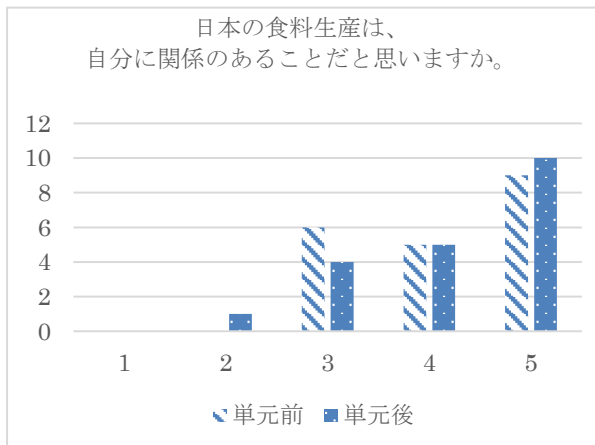
各自が計画に沿って学習を進めた。前単元の「水産業のさかんな地域」の学習では、単元実施後のアンケートから学習内容の理解に困難さを抱える児童がいることが分かった。そこで、毎時間、最初の5分間で教師と児童で、学習内容に見通しをもつ時間を設定した。1、2時間目には、各自が黙々と学習していたが、3、4時間目には、友達に声を掛け、分からないところを教え合ったり、友達の学びレポートを見て良いところを真似したりする姿が見られた。教師との対話の中で内容を理解したり、考えを練ったりする児童もいた。また、課題を終えた児童の中には、さらに深く追究しようと、発展的な学習に取り組む姿も見られた。

③ 学習問題に関する自分の考えを交流する。(第3次)

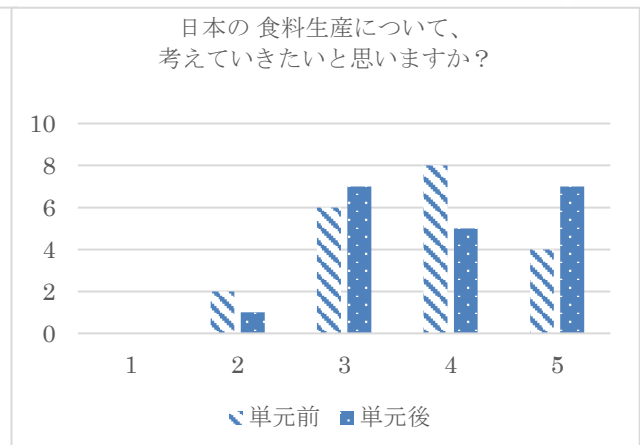
各自が作成した学びレポートをもとに自分の考えを紹介し合った。グループに一人残り、残りのメンバーが他のグループに移動し、それぞれの考えを聞きに行った。全員が紹介できるように数回同様の活動を行い、様々な考えに触れたり、質問したりしながら、自身の考えを深める時間を設定した。交流の後、代表児童に全体の前で発表させ、児童から出た考えを教師が分類した。学習問題に対するまとめを全体で確認した後、学習問題に対する最終的な自分の考えを振り返った。

(2) 研究テーマに関わって

- ① 「日本の食料生産は、自分に関係のあることだと思いますか。」「日本の食料生産について、(今後も)考えていきたいと思いますか。」の2点について単元前後でアンケートを実施した。グラフ1、2を見ると、肯定的評価(4, 5)がどちらも高く、食料生産という社会的事象について身近に感じ、今後も主体的に考えていこうとする姿勢が見受けられた。(グラフ1、2の数字は、5に近づくほどよりその思いが強いことを示す。)

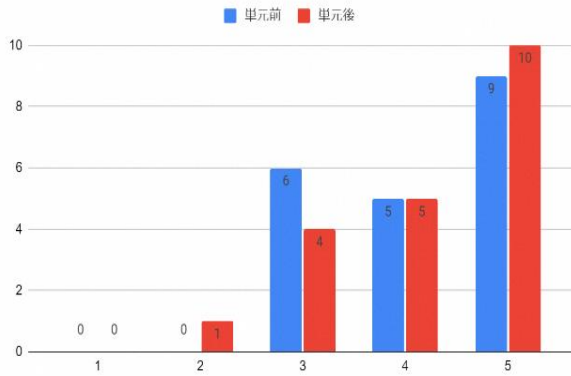


グラフ1



グラフ2

日本の食料生産は、自分に関係のあることだと思いますか。



グラフ 3

② 「自由進度学習は、自分の成長につながっていると思いますか。」の項目では、肯定的評価が80%、否定的評価が10%であった。「自分で予定を決められて予定を考える力や進み具合のほしいの予測ができるようになるのはいい」「みんなとの交流会や自力で頑張る力が付くと思うので、私はこの自由進度学習を続けていってもとても楽しくて、良い成長になる」との記述があり、児童が主体的に学習に向かう手立てとして効果的であったと考える。

③ 単元末の振り返りでは、計画と照らし合わせ学習を自ら調整する姿や、自分事として食料生産について考えている姿の具体的な記述として以下のようなものが見られた。

- これからの食糧生産について、今まで真面目に考えたことはなかったし、自分にできることがこんなにあるなんて知りませんでした。身近な生活から意識すれば、食料自給率を上げるための第一歩につながると知り、驚きましたし、自分も意識して過ごそうとも思いました。これからは、食品を買うときに、どこ産のものなのか調べて、なるべく地産地消をしたいと思います。
- みんなのプレゼンを見て私とはちがう考えをされていてびっくりしました。（農業体験や土地をかりて農業やその市の食料自給率の目標を立てたりそういう考えの人がいました）ちなみにわたしは国産の食べ物を買うや農家さんが増えるようにイベントをしたり野菜試食会をしたりすると思います。これから食料自給率が上がるといいです。
- 私は自由進度学習を通して、『そういう見方もあったのか！』と気付けるところがありました。自由進度学習で、自分以外の見方を見つけられるからもっとやりたいなと思いました。
- どうしたら日本の食料自給率が世界一になるのか考えていきたいです。食べ残しなど少しは工夫するだけで食料自給率が上がるから減らしたいと思います。食料を買うときは、その食料の原産地を見てできるだけ食料自給率を上げようと頑張っている生産者さんのものを買いたいです。
- 自分で学んだから、自分のものになったし、上手くまとめられたり、発表したり、日本が危ないのが分かって、国産の食材も値段を低くしたほうが売れるのかなと思いました。

(3) 今後の課題

① 学びの保障と協働的な学びについて

自由進度学習の実施後、「テストの点数に結びつかない」「先生に教えてもらう方が分かりやすい」という声があった。実際に、この記述をした児童は100点をとることが多かったが、自由進度学習をするようになり90点台が多かった。学習の様子を見ると、学習への意欲は低いものの、時には友達や教師に声を掛け、なんとか課題を解決しようと取り組もうとしていた。学習内容が異なるため、単純比較はできないが、クラス全体の平均点としても、一斉授業をしていた時期には93点だったが自由進度学習を始めてからは91点に下がった。また、満点だった児童の割合も減っている。児童にとっては、主体的に学びに向かう力という実感にくいものよりも、テストの点数というはっきり見える物によって自

分の成長を実感する部分が多いようである。今後は、テストの結果だけでは表すことができない児童の成長を見える形で実感させる必要がある。

そこで、本研究テーマ副題「個別最適な学びと協働的な学びの往還を通して」の「往還」について、さらに力を入れていく必要があると考える。本実践では、自由進度学習の途中で、児童同士が協働的に学び合う場面を意図的に設定していなかった。児童の中には、分からないことを質問したり、学びレポートの途中経過を見せ合ったりする様子があったが、多くの児童は個別に学習を進め、単元終末部で交流していた。自由進度学習の中に、児童同士が学び合い、協働的に解決する場面を教師が意図的に設定していけば、児童は個別最適な学びと協働的な学びとを行き来する中で、学習内容の理解を深めていく姿が期待できる。また、繰り返し経験させることで、児童が主体となって学ぶ楽しさや良さに気付く姿も期待できる。個別最適な学びと協働的な学びの往還を通して、学習内容の確実な定着を図るとともに、主体的に学ぶ良さを実感させることができるよう、今後も研鑽に励みたい。

② 学習問題の設定について

本実践では、児童が主体となって学ぶ際に学習の方向性を見失わないように、単元で学ぶ内容については教師が示した。単元を貫く学習問題は児童と一緒に「豊かな食を守りながら、食料自給率を上げるためには、どうすればよいか。」とした。テーマが食であり、児童にとって身近で取り組みやすさはあったが、本当に考え抜きたい問題にはなっていないため主体性を発揮しきれていない様子が見られた。児童の主体性を引き出すためにも、もっと調べたい、深く考えたい、友達の考えを聞いてみたいと思える学習問題を設定することが必要である。

③ 深い学びについて（見方・考え方）

国立政策研究所の資料【学習指導要領を理解するためのヒント】に照らし合わせて実践を振り返ると、児童は自由進度学習の際に、情報を精査して考えを形成することができていたように見えた。一方で、交流の場面では、友達の考えに触れ、新たな視点を得ることはできたものの、それが知識を相互に関連付けてより深く理解することにつながっていなかった。これは、友達の考えを踏まえ、再度自分の考えを見直したり、練り上げたりする経験の不足が原因であると考えられる。さらに、どのように関連付けたり、どのように批判的に事象をとらえたりすればよいか見当を付ける等、社会科の「見方・考え方」が身に付いていないことにも起因していると考えられる。友達との交流によって自分の学びが深まる実感を得ることは、学びの楽しさにつながるだろう。以上のことから、主体的・対話的な学習を促すためにも、学習に必要なスキルの定着を保障していくことが重要である。

参考文献

奈須正裕『個別最適な学びと協働的な学び』東洋館出版社．2021

小山儀秋『新装版 教科の一人学び「自由進度学習」の考え方・進め方』黎明社．2022

文部科学省『小学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説社会編』2018

中越教育事務所．『授業改善リーフレット 2022 フォローアップ第 5 号』．2022.

<https://www.pref.niigata.lg.jp/site/kyoiku-chuetsu/follow-up-2022-volume5.html>

国立教育政策研究所．『学習指導要領を理解するためのヒント』．2020.

https://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pdf_seika/r02/r020603-01.pdf